

北緯 17 度線の下で

- ヴェトナム戦跡ツアーⅡ Hue DMZ Keh-Sanh -

ホーチミンからフエへ

2003 年春、世界はイラク戦争を目の当たりにしていた。道理の通らぬ戦争、大義なき戦争と言われても、アメリカはこの戦争に踏み切った。そして日本政府も曖昧なままこの戦争を支持した。しかし、日本国民の多くは反対だった。先の大戦の反省に立つわが国だからこそ、当然と言えば当然だった。私自身も、戦争の成り行きにはおおいに関心があった。しかし、戦争が始まった 3 月末、かねてから予定していた南の国ヴェトナムへ旅立つことになった。

考えて見ると、ヴェトナム行きもまた戦争と平和の問題に関心があったからだと思う。この地で繰り広げられた戦争は、私自身が十代の時に起きたもので、世の中に関心を向けるようになって最初に遭遇した、身近な戦争だった。中学時代、我が家の安普請(やすぶしん)の上空を何機もの米軍機がかすめて、立川や横田の基地に向ったのを、今でも良く覚えている。しかもこの戦争は、テレビや新聞でその日の戦況を直接知ることができたのだから。何が正義かとこだわっていた当時の私が、単純な反共主義を捨てアメリカの戦争に疑問を持ち始めたそのきっかけともなったものだ。

さて、ホーチミン市ではサイゴン川の辺にある、その名も「リヴァーサイド」ホテルに宿泊した。テレビをつけると CNN が映り、アマンポールというインド系米国人の女性キャスターが戦況を報道していた。緒戦で米軍がてこずっている時だった。イラク戦争はここでも関心の的だった。

この地に来て 5 日目、3 月 30 日の朝、ホテルを引き払ってタンソンニャット空港までタクシーで出かけた。ヴェトナム航空 254 便で、中部のフエに向う。かつてヴェトナムを南北にわけた 17 度線の南に位置する都市だ。機上



ホーチミン市とサイゴン河

に 1 時間、やがて機はゆっくりと旋回し着陸態勢に入った。機内から窓越しに見え出したのは、一面の緑に覆われた田んぼの広がり、その周囲を所々クリークが囲んでいるようだった。人家が見当たらないのは、地方に来たせいなのか。その広々とした様子が何か心地よい。到着したのは、古都フエの南方に位置するフーバイ空港で、気温がいささか過ごしやすくなったように思った。

空港からフエの市中へと乗合タクシーで向う。英語を話す車掌の薦めで、新市街の一角にある「タイビン」ホテルに宿をとることにした。ドイモイ(改革)以降に造られた、こぎれいなホテルだった。午後はさっそく、この地にあったグエン(阮)王朝の宮殿を散策することにした。19 世紀初めこの地に成立したグエン朝は、その成立をフランスが助けた縁でその後フランスの植民地へと屈して行き、ヴェトナムでは最後の王朝となった。

街はフーン川をはさみその北側に王宮のある旧市街、南に公共施設やホテルなど並ぶ新市街が広がっている。ホテルからすぐフーン川を渡り王宮地区に入る。二重に張り巡らされた掘割を渡ると、正面に位置する午門が見えて来た。そこをくぐると広大な王宮の敷地となる。中国風の王宮で、蓮池と髪を逆立たような狛犬の像が迎えてくれた。しかし正面の大和殿を通りぬけるとその先にはほとん

ど建物が無い。実は、この王宮自身がヴェトナム戦争では激戦地になったのだ。そのために王宮のほとんどが、今なお修復できずに空き地となったままなのだ。



フエの王宮跡

テト攻勢のフエ

1964年のトンキン湾事件以降、アメリカはヴェトナムに直接介入した。南部ヴェトナムの反共政府を支援し、軍隊を送り込んだのだ。当初、在南ヴェトナムの援助軍司令官ウェストモアランド将軍は、米軍の介入で北ヴェトナム側と解放戦線を撃退できると楽観的な説明をしていた。それを吹き飛ばしたのが68年1月末から全土で起きた両軍によるテト(旧正月)攻勢だった。

31日未明、迫撃砲弾が王宮の一角にある南ヴェトナム政府軍第1師団司令部に着弾した。これを合図に北ヴェトナム、解放戦線両軍が市内に突入。一挙に占拠した。攻撃隊は午門の上に高々と解放軍旗を掲げた。フエの南、ダナンに基地のあった米軍でさえ当初この事態を把握できず混乱したが、まもなく米軍11個師団がその奪回のため派遣された。南側の新市街に入った米軍は1週間後、フーン川の一角にたどり着く。しかし、市内では文字通りハウス・トゥー・ハウス・ファイティングが続いていた。市民に6000人の犠牲者が出た。海上からは米軍の王宮に向けた艦砲射撃が続いた。

この間サイゴン(現ホーチミン)市でも解放戦線側が、アメリカ大使館と大統領宮殿を一

時占拠し、市内全域で戦闘が行なわれた。アメリカ人が初めてテレビで見る戦争として、その衝撃的な映像は全米の居間に直接届けられた。しかし北と解放戦線が夢見た全土の解放は、短時日の内に撃退されこのテト攻勢は戦闘としては、失敗だったと言われる。ただフエのみが米軍の猛攻に1ヶ月近く持ちこたえたのだ。そうして2月24日、北側・解放側は忽然と王城から姿を消した。しかし、宮殿の被害は甚大で大半が砲爆撃と火災で破壊されてしまった。

残された、また僅かに復元された建物から類推すると、1キロ四方の広大な敷地には、北京の紫禁城のようなオレンジ色の瓦をふいたパビリオンが立ち並んでいたはずだ。今はその多くが失われ夏草に覆われている。まことに残念なことだと思う。そして兵士にも多くの犠牲者が出た。午門の南側に対峙する国旗掲揚台(フラッグタワー)には、今ヴェトナム国旗が掲げられている。戦闘の終盤、米軍の兵士はこの掲揚台に駆け上がり王宮の敵と交戦した。掲揚台は見る見るうちに米兵の屍の山になった。その姿を必死で撮影したカメラマン沢田教一も、その数年後にヴェトナムで命を絶った。



フエのサイゴンモリンホテル

夕刻近くまでこの王宮跡にいた。フーン川を渡ってホテルに帰り、シャワーですっきりして夜の町に出た。連日の暑さでお腹もゆるく、晩飯はこの川に面した通りにある豪壮なホテル「サイゴンモリン」でとった。メニューが写真つきで、ウェイトレスの説明も丁寧だったからだ。フランス様式のホテルは、インテリアも落ちついていて、食事の後は中庭

に出てみた。ここでデザートにコーヒーを飲みながら宮廷音楽の演奏に耳を傾けるのはとても気持ち良かった。

戦時中このホテルはフエ大学の校舎で、テト攻勢の際は川をはさんで王宮を攻撃する米軍が拠点とした建物だった。同時に交戦で犠牲になった住民の応急施設にもなったという。砲弾が響く中、詰めかけた市民により血の匂いが充満し、床は血糊で滑ったと言う。戦争の記憶は、このホテルにもまわり着いていた。

北緯 17 度線を越えて

3月31日の朝午前5時、ホテルの外に出ると辺りはひんやりと朝まだきの中にあつた。この日は、かつて南北を分けた北緯17度線の、その両側に設けられた非武装地帯(DMZ)沿いの戦跡を訪ねるツアーにでかけた。まもなくフエ市内のホテルを回り参加者を拾ってきたバスが来た。それに加わり、バスの一番後ろに坐る。当日の参加者は総勢18人。私以外は若者で、しかも欧米の白人社会からやって来た者ばかりだった。半数以上が女性というのも意外だった。

バスは、市内を出て国道1号線を北へとひた走る。眠たいが、運転手が断続的に鳴らすクラクションの音で、そうも行かない。見ると街道には、自動車やバイクだけでなく、荷車を引く者や歩行者などひっきりなしだ。バスは彼らをけ散らしながら、先を急ぐ。しかし途中何回か片側で道路工事が行われていて、バスはしばらく渋滞に身を任せるしかなかった。郊外の風景と言え、道路沿いにコンクリート製の平屋が目立つが、それらは大半公共施設のような感じだ。緑の田園には椰子(やし)など亜熱帯の木々を植えた草葺の農家が点在していた。

1時間ほどたちクアンチの町に入った所で、バスはようやく止まり、休憩となった。目の前に建つのは弾丸を浴びて痛々しいカトリック教会の廃墟だった。この町を含む17度線

の南側、クアンチ省の町の多くは、70年代前半の米軍と北ヴェトナム正規軍が戦車を繰り出した戦闘で、激しい砲爆撃にさらされ、一時は建物らしい建物がなくなるほどの被害を受けた。それでも戦争から四半世紀、町は再建されたのだが、戦争のつめ跡を忘れぬためにと、この教会はそのままの状態に残されている。

さらに一走りして、バスは9号線が合流する交通の要衝、ドンハの町に入った。町の中心にあるドンハホテルでトーストと紅茶の朝食となった。再建を急いだせいか、この町の建物は荒っぽくみすぼらしさが目立つ。このホテルも、コンクリートの躯体に家具や設備を入れただけかと思うほど素っ気ない。食事が終わったところで寄って来たその昔解放戦線の兵士だったというグエンさんから、貧しい子供の里親になってくれないかと誘いがあった。しかしあまりに唐突なので、お断りするしかなかった。



南北の境だったベンハイ川

再びバスに乗り込むと、ここからはガイドの女性、タイさんがつくことになった。再び1号線を北上する。途中にゲートがあって、検問が行われていた。説明だとここからが旧DMZだと言う。統一がなった後もなぜ検問が続いているのか。残念だがその理由を聞き逃した。まもなく辺りに水田が広がったかと思うと、ベンハイ川を横切り、ついに旧北ヴェトナム側へと入った。

沿道のホクサの町でバスは大きく右折し、

わずかに起伏した台地の上に行く。起伏に沿って曲がった道を行くと、やがて目的地のヴィン=モック村についた。戦時中、この村は米軍の海陸からの攻撃にさらされ村を放棄するか否かを迫られた。しかし彼らはあえて地下に逃げ場を掘ってもぐり、生活した。我々もその狭いトンネル内に入って見る。中には共同の炊事場や子供のための託児施設など、生活の場が地下に集合した様を見ることができた。そしてトンネルの向こうに明かりが見え出たところ、これがなんと波静かな南シナ海の海岸ではないか。正面は砂浜だったが北よりの磯には木造の漁船が浮かんでいた。

ケサン(ケシャイン)基地跡へ

付け替えたばかりのベンハイ川のヒエンルーン新橋を渡り返し、あのドンハホテルに戻り昼食をとる。そして午後は 9 号線を西に、ケサン(ケシャイン)基地までの道を往復した。戦時中アメリカは、北側が解放戦線を支援しこの地とその西側のラオス領内を多くの軍事要員と物資を南下させることを阻止しようとした。9 号線は米軍と南側の防衛線となり、いくつかの重要な基地が置かれた。緑の田園が過ぎ丘陵地にかかる辺りで、一度バスを降りた。タイさんが正面に見えるロックパイルという山について説明する。戦争中米軍がこの頂にヘリコプターで降下する基地をつくり、辺りを睨んでいたという。激戦の時には米軍が枯葉剤を周囲に撒き、この辺りの林は今もダイオキシンに汚染されやせているという。辺りの景色になるほどと思った。

ここからバスは山地の川沿いに少しずつ高度を上げていく。途中ラオス系の少数民族の集落や、ダクロン橋と呼ぶホーチミンルートの一つを見た。やがて道がやせ尾根の上に行くようになると、わずかに霧がかかって来た。海拔も 400m を越え、初めて涼しさを感じる。最後にケサンの町にさしかかり道を右折してまもなくで基地跡の入り口となった。赤色土の道を入ると立派な門扉をそなえたその戦跡

があった。

フェでは激戦となったあのテト攻勢の年 68 年の 1 月、この地ではそれに先駆けて北ヴェトナム正規軍による戦闘が始まっていた。この山地の上に米海兵隊が構築した滑走路を狙い、北側は数百の大砲を用意して包囲戦を始めた。そしてテト攻勢に先立つ 1 月 21 日の早朝から大攻勢に出た。ケサン基地には、その北と西方から正規軍の砲火が襲った。武器庫が大爆発を起こし海兵隊には多くの犠牲者が出た。しかし、南方のダナン基地からの航空隊による反撃もすばやかだった。それはアメリカ政府がケサンを第二の「ティエンビエンフー」にはならないと総反撃に出たためである。周囲の山地に激しい猛爆撃が続いた。



ケシャイン基地跡にて

やがて 2 月に入りテト攻勢が全土に広がった時に、ケサンの戦闘はかえって静かなものとなった。それは明け方に谷から湧き上がる霧に隠れて北側の兵士が基地の目前まで迫って来たからで、戦いが至近距離の遭遇戦へとなったからだ。米軍にとってぶきみだったのは、北の兵士が掘り続けたトンネルがやはり基地の目前に迫り、孤立する彼らを至近で包囲し始めたことだった。もはや空からの救援物資投下もままならなかった。米軍は B52 その他を空爆に投入し、実に 11 万 4 千トンもの爆弾を投下したという。この援護のもと、4 月には米軍の脱出作戦が行われようやく危機を脱したという。作戦での犠牲者、米軍が 1500 名、北側は何と 8000 名だという。北側の兵士の多くは行方不明者で、今もその遺骨は遺族

に帰らぬままだという。

その戦場跡にたつと、地面には今でも野砲やその砲弾の薬きょうが無造作に置かれていた。そして眼下には険しい谷。明け方の霧を生かして、周囲は輸出用のコーヒー農園となっていた。戦場で見つけたもので商売する者も。その光景からだけでは、とうていこの地で戦われた激戦を想像することはできそうになかった。 <了>